

編纂された〈失恋体験〉 ——堀辰雄『美しい村』論——

宮村 真紀

はじめに

堀辰雄の中編『美しい村』は、「序曲」「美しい村 或は小遁走曲」「夏」「暗い道」の四章から構成されており¹⁾、堀にとって、短編を組み合わせて一つの物語となる初めての作品であった。さらに、「序曲」は作家である「私」（手紙では「僕」）が執筆する手紙、「美しい村 或は小遁走曲」²⁾、「夏」と「暗い道」は「私」の手記という形式になっており、失恋をしてK…村に滞在する「私」が、相手に会うことを恐れつつ、新しい少女との恋愛を萌芽させていくというテーマとなっている。

先行研究では、失恋から新しい恋へとテーマが変容すること、様々なテーマを複合的に組み合わせた物語であること、プルスととの関連の問題などが論じられてきた³⁾。しかし、比重が置かれるのは新しい少女との恋愛のテーマであり、「私」の失恋体験が、テキスト内でいかなる効果を醸し出しているかということ考察する論はほぼなかったと言える。「私」は、失恋の記憶に苦悩しているだけでなく、滞在しているK…村で、失恋相手（「細木さん」という名前であることが記されるが、本論では「失恋相手」と記す）と遭遇することを恐れる。新しく出会った少女との恋愛が始まると同時期に、失恋相手がK…村に来るため、少女との出会いの後も、その恐怖は持続するどころか、一層強まる傾向を見せる。

失恋相手がK…村の別荘を訪れるのとほぼ同時期に、あえてK…村を訪れ、新たに出会った少女と離れがたいという理由で、K…村にとどまり続ける-失恋相手といつ遭遇しても不思議ではない状況に、あえて身を置こうとしているとも見える「私」の行動は不可思議と言えよう。失恋・失恋相手にまつわる「私」の苦悩や恐怖を〈失恋体験〉と称し、失恋相手に遭遇することを「私」が強く恐れる理由、遭遇を恐れながらも「私」がK…村にとどまる理

由を考察すること、そして失恋の表象から浮上するこのテキストが語られた意味を明らかにすることが、本論の目的である。テキストは、定本として一九三四年四月に野田書房より刊行された『美しい村』を分析対象とする。「序曲」では「僕」という人称が用いられているが、主人公及び語り手（また「美しい村 或は小遁走曲」の作者）を、本論では統一して「私」と記すこととする。

1. 〈失恋体験〉が奪ったもの

まず、『美しい村』の主人公である小説家の「私」にとって、失恋相手がどのような存在であったかを確認していきたい。「私」が「僕」という呼称で、失恋相手と思しき「あなた」に宛てた手紙の形式を取った「序曲」の章には、失恋相手と「私」とが恋愛に包摂しきれない関係性を持っていたことが記されている。

手紙の中で、「私」は失恋相手に、「舞踏会」⁴⁾を「二三年前、(略)無理やりにお読ませし」たことがあり、「読みかけ」の「クレエヴ侯爵夫人」について、失恋相手に「一番その読後感をお書きしたいし、また黙つてもゐたい」と述べている。さらに「舞踏会」について、「それをお読みになつてもあなたは何もおつしやらなかつたし、僕もそれについては何もお訊しなかつたが、それでも或る気持はお互いに通じ合つてゐたやうでした」と語り、「小説の読後感」をかつてのようには、彼女に語れなくなったことを示唆している。いずれにしても、失恋相手には文学的素養があり、「私」は文学を享受した時、文学批評を語る相手として、失恋相手を最初に想起していたことが明らかとなる。両者の間に、活発な文学議論が交わされたとは書かれないものの、「舞踏会」について、「或る気持はお互いに通じ合つてゐた」と「私」は解釈していた。失恋相手と「もう見知らない人同志の

やうに顔を合せ」る関係性となったことは、恋愛が成就しなかったというだけではなく、「私」が文学を享受し、批評する情熱を共有する相手を喪失したことを意味しているのではない。

また、小説家の「私」が、小説を脱稿した後に記した手記の形式を取る「暗い道」では、次のような場面がある。新しく出会った少女と散歩をしている「私」は、失恋相手の別荘に接近し、失恋相手と遭遇してしまいそうになる不安の中で、「学生時代からの友人」とその妻、妹達に会う。その友人は、「私」に「さつき君のところへ寄つたら留守だと言ふんで、それから細木さんのところへ行つて見たんだ。あそこの家もみんな出払つてゐるんだ……」と語る。この友人は、かつての「私」と同じく、失恋相手の一家とも親交があり、「細木さん」の名前を気軽に出すことから、「私」が失恋相手を回避するようになったことを知らない様子が窺える。失恋相手とその家族（「細木さん」）は、「私」や友人などのように、K…村に集い、文学的素養を備えているであろう者達のコミュニティの一員であったことが窺える。「私」が「僕んところへ寄つてけよ」と言って一人で歩き出し、失恋相手と遭遇することをより怖れるようになるのは、失恋相手、つまり「細木さん」と遭遇することを避けるようになっていることを友人に知られ、K…村に集う文学コミュニティの他の構成員との関係性に支障が生じることを案じているという可能性もある。このように考えると、「私」は失恋によって、文学批評を共有する相手を喪失しただけではなく、K…村に集うコミュニティに所属し続けることを危惧することとなる。

同じく手記の形式を取る「夏」で、「私」は、人通りが多い水車の道で絵を描く少女から距離を取ることについて、「そんな人目につき易い場所で私が彼女と親しうにしてゐるのを、私の顔見知りの人々に見られたくなかったからだ」と述べている。単純な羞恥というだけではなく、K…村で出会う「顔見知りの人々」つまり、「細木さん」も加わるコミュニティの人々が、「私」の失恋相手への好意を知っていた場合、新しい少女と共にいることを見られるのを憚ったともいえる。いずれにしても、「私」にとって、K…村で出会うコミュ

ニティの人々の視線は重要であった。

2. 口実としての恋愛

「夏」の章で「黄いろい麦藁帽子をかぶつた、背の高い、痩せぎすな、一人の少女」と出会い、親しくなっていた「私」は、「一人の新しい少女のために、そんな昔の少女たちのことを忘れがちであつた」、かつて愛していたK…村の風物について、「今ではもう私には魅力もなんにも無くなつてしまつてゐた（略）それほど、私自身は私のそばにゐる彼女のことではばいになつてしまつてゐる」と、新しい少女に関心が集中したことを主張するようになる。「夏」で「私」が主張したいことは、野薔薇に対する「感動」が失われたことについて、「あの頃からすべてが變つてゐた」という言葉に顕著な通り、新しい少女との出会いによって、自己の心境に変化が生じたということである⁵⁾。

そして、失恋相手が来る前にK…村を去るべきだとしながらも、「やつと自分の手に這入りかけてゐる新しい幸福を、そうあつさりと見棄てて行けるだらうか」「こんなにまで私と打ち解け合ひだしてゐるこの少女を振り棄てて、自分ひとりこの村を立ち去るなんぞといふことは、到底出来さうもない」と考えるに至る。その一方で、「私」はK…村に来ている可能性がある失恋相手との遭遇を、より恐れることとなる。「私」は少女との散歩中も、失恋相手に遭遇することについて「気を揉み、似たやうな人」を見かけると「慌てて、その人たちを避けるために、道もないやうな草の茂みのなかへ彼女を引つ張りこんで、何んにも知らない彼女を駭かせる」という行動を取っている。

新しく親しくなった少女に、失恋相手との遭遇を見せたくないという心理があつたにせよ、ここから窺えるのは「私」の激しい恐怖である。最後の章である「暗い道」と合わせると、「私」がK…村にとどまることを決心したのは、新しい恋によってというよりも、新しい恋を口実にして、失恋相手に遭遇するリスクへ身を投じたのではないと言える。

やがて、「暗い道」の章では、失恋相手がK…村に来ていることが決定的になることによって、共に散歩している少女までも後景化していく⁶⁾。前

節でも言及したが、この章で「学生時代からの友人」に会った「私」は、失恋相手に遭遇しないように、「草ぶかい坂道をずんずん一人先きに降りてい」き、共に歩いていた少女は、「他の連中」と一括される。さらに友人の妻と数年前に村で会っていたことを想起し、「その出会いは私にはあんなにも印象深い」が、友人の妻はそのことを忘却しているのではないかと考える。「夏」の章で、新しい少女は今まで出会ってきた少女とは異なる、特別な少女として語られていたが、「私」は友人の妻のかつての姿に思いを馳せ、新しい少女は最早特別な存在ではなくなっている。さらに、「そのうちの誰かが足を滑らして、「あつ！」と小さく叫んで、坂の中途にどさりと倒れたらしい気配」を「私」が感じる末尾の場面で、新しい少女は完全に後景化される。

「私」は、この転倒した「少女」を「ただぼかんとして眺め」、「何んの関係もないやうなことを考え出」すという淡白な態度を見せる。「私」の後を歩く友人の妻や妹達は「若い女たち」と呼ばれているので、転倒した「少女」は、新しく出会った少女である可能性が高いが、それを確定するような語りは行われていない。転倒した「少女」が誰であるか明記されないことは、つまり彼女が誰であろうと、「私」には重要ではなくなっているということではないか。「私」がこの時想像する「花売り」の青年は、新しい少女が絵のモデルにしようとしていたことから、「夏」の章では「私」の嫉妬の対象であった⁷⁾。しかし「暗い道」では、失恋相手と遭遇する可能性を想定して、緊張感を募らせる「私」が、気を紛らわせるための存在となっている。少なくとも、失恋相手と接触することへの恐怖により、「暗い道」の章で、新しい少女の存在は、急激に後退していくことが確認できる。

「暗い道」における「私」にとっての新しい少女の心理表象を見ると、「夏」の章は、新しい少女による「私」の内面の救済⁸⁾ではなく、新しい少女との恋愛を口実にして、失恋相手と遭遇する状況へと身を置く「私」を描いていると言える。新しい少女によって、「私」は再び恋愛の当事者となることが可能となった。また、少女が「細木さん」を含めたK…村のコミュニティに属していないことに対する〈気楽さ〉があったと推測される。し

かし、新しい少女は、絵画を描くなどの文化的素養はあるものの、テキストに描かれる限り、「私」が身を置く文学の領域に、失恋相手ほど造詣が深い人物とは描かれていない。さらに、「私」は前節で確認した通り、K…村のコミュニティに未だに価値を置いている。文学やK…村のコミュニティに「私」が価値を置き続ける限り、新しい少女との愛では、補填できない側面が生じてくるのである。

3. 物語の喪失と再生

「私」は失恋によって、文学批評を共有する相手を喪失した上に、K…村におけるコミュニティへの所属も危ぶまれるようになったこと、新しい少女との愛によって変化したという「私」の主張の背後に、新しい愛によっても失恋による喪失は補填しきれないこと、失恋相手との遭遇の恐怖は軽減していないどころか、遭遇が現実的になると、新しい少女までも後景化していくことを確認してきた。それでは改めて、「私」が何故失恋相手との遭遇をそこまで恐れたのか、そして小説家の「私」が、手紙や手記を組み合わせた『美しい村』を記したことの目的を考察していきたい。

『美しい村』は、「小説創造の叙述と小説の叙述とが同居する形態の小説、あるいは〈書くこと〉じたいを書くことの主軸に据えた、いわゆるメタフィクション」⁹⁾であると中村三春論では指摘されている。「美しい村 或は小遁走曲」の章は「この土地ではじめて知り合いになつた或る女友達との最近の悲しい別離」を主題にして、コンスタンの『アドルフ』をモチーフに小説を執筆しようとしていたが、次第にそれが無意味に思われ、滞在中の村を題材とした「古い絵のやうな物語」を描こうとする小説構想を行う「私」が語られる。また、「夏」の章で、「私の書きつつある『美しい村』という物語は、六月頃からこの村に滞在してゐる私が、そんなまだ季節はずれの、すつからかんとした高原で出会ったことを、それからそれへと書いて行つたものだつた」という記述があり、「美しい村 或は小遁走曲」の内容とどこまで重複するかは不明であるが、いずれにしても「夏」の章の段階で、「美しい村」という小説が、完成したことが明らかとなる。このように、小説を書こうとして

様々な模索を広げる、作家・「私」の試み¹⁰⁾は、彼自身が、失恋によって阻害された文学への情熱を取り戻していく試みの作品でもあったのではないか。そのためには、文学のコミュニティが形成されていたと思いきK…村をモチーフにする必要があったのである。「暗い道」の章で、失恋相手の別荘が近づくと「私」は「心臓をしめつけられるやうな息苦しさ」を感じ、「不安が、既にその絶頂を通り越してしまつてゐたせゐ」で「冷静さ」を取り戻したと自己分析するほど、不安が頂点に達する。

テキストの形式が異なるため、単純に比較はできないが、「序曲」の「私」（「僕」）は、過去への哀惜から、無人である細木家の別荘の周辺を歩こうとする意志が見られ、「美しい村 或は小遁走曲」の「私」は、庭に羊歯を植える「爺や」と共に、無人の細木家の別荘に入っている。「私」が恐れているのは、恐らく再び訪れることが困難であろう細木家の別荘ではなく、失恋相手と遭遇することであることを確認する必要がある。遭遇を恐れる理由の一つとして、新しい少女や友人に関係性の破綻を見られることに抵抗があるためという理由については前述した。そしてここには、もう一つの理由がある。美しい村 或は小遁走曲」の「私」は、出会った頃は「うひうひしい面影」であったが、「数か月前最後に会った時」は「今だに私の眼先にちらついてならない（略）冷やかな面影」へと変貌したと語っている。つまり、失恋相手と今後接触したとしても、好意的な態度で迎えられない可能性が想定される。それが気づまりというだけではなく、相手の「冷やかな」態度が、失恋体験に傷つきながらも、村の風物を眺め、新しい少女によって癒されていくと言う『美しい村』の中で書き継いできた「私」の作業の意味を無効化してしまう可能性があるのではないか。

『美しい村』という作品を執筆・編纂することによって、「私」は、失恋によって喪失した、文学を書き、仲間と談義していた自己を取り戻そうとしたと考えられる。しかし同時に、「私」が形成しようとする文学世界は、失恋相手との遭遇することで、崩壊する危うさを備えることによって、成立しうるものだったのではないか。

「美しい村 或は小遁走曲」で、小説を書こうとして題材に悩む小説家の物語を、『美しい村』の主人公である「私」が語っているということについては前述した。小説を書こうとして書けない小説家の物語を幾重にも重ねることによって、失恋によって文学活動を〈阻害〉され、再び文学活動を取り戻していく小説家の「私」の姿が浮上していると言えよう。

おわりに

K…村の人々、新しい少女、友人達と異なり、失恋相手は遭遇した時、「私」を批判的に批評し得る存在として、彼自身に認識されている。その失恋相手と遭遇することによって、自在に相手を空想の題材とする「私」の一方向的な行為が〈阻害〉されてしまうという観念を「私」は抱いていると見られる。それを回避し、自らの物語世界を〈保護〉しながらも、一方でカタルシスを欲望する、相反する「私」の心理が『美しい村』全体に流れている。恋愛対象を空想の題材とする前記の堀文学の男性主人公の特徴を、「私」も備えていると言えるが、新たな空想の対象となる少女と出会った一方で、「私」に批判的な視線を投げかける（と想定される）失恋相手が登場する『美しい村』は、恋愛相手を一方的に空想の対象とすることの限界が次第に露呈しつつあるテキストであると言える。この限界は、『風立ちぬ』において決定的となり、空想の対象とされてきた女性達が、空想する男性達を批評し始める後期の作品へと繋がっていくのである。

【注】

- 1) 『美しい村』の初出は次の通りである。「序曲」（『大阪朝日新聞』1933.6.25、原題「山からの手紙」）、「美しい村 或は小遁走曲」（『改造』1933.10）、「夏」（『文藝春秋』1933.10）、「暗い道」（『週刊朝日』1934.3.18）。
- 2) この章が、作中作の「美しい村」の一部か、作中作を構想する際の手記かは確定できないが、中村三春は「『美しい村』の生成-花のフラクタル-」（『国文学解釈と鑑賞』61（9）1996.9）で、「『美しい村』の内容はほぼ『美しい村』に包含されることがわかる」と述べており、本論もこの説に同意する。
- 3) 複数の主題を持つ物語であることに言及した論考とし

て、野沢京子「幻像の生成-堀辰雄『美しい村』を読む-」(『立教大学日本文学』60 1988.7)や永野悟「堀辰雄『美しい村』論-「純粋小説、の試みを読む-」(『群系』17 2014.10)、ブルーストの関連を論じた論考として、池田博昭「堀辰雄とジャック・リヴィエール-「美しい村」再論」(『芸術至上主義文藝』37 2011.11)、宮坂康一「堀辰雄『美しい村』における「変化」-作品及びプルースト受容の「変化」-」(『国文学研究』177 2015.10)、愛の変化というテーマを論じた論考として岩崎俊郎「『美しい村』論-堀文学における「作風の転調」をめぐって-」(『山口国文』5 1982.3)、レトリックを考察した論考として、広瀬正浩「二つの「夏」-『美しい村』形成で排除されたもの-」(『南山国文論集』22 1998.3)、渡部麻実「『美しい村』の創造力と想像力-自己完結しないテキスト-」(『日本女子大学院の会 会誌』19 2000.3)、渡部麻実「『美しい村』のメチエ-隠置かれた《装置》-」(『国文目白』35 1996.2)などがある。

4) 堀辰雄は、随筆「レエモン ラジゲ」(『文学』5 1930.2)などで、ラディゲの「ドルジェル伯爵の舞踏会」について批評しているが、この手紙における「舞踏会」はこの作品を示す。

5) 「美しい村 或は小遁走曲」の主人公「私」も、細木家の別荘を訪れた「私」は、失恋相手を愛していた当時とは変化したことを主張している。『美しい村』全体で見ると、新しい少女との出会いのみが、小説家の「私」あるいは物語の主人公の「私」に変化をもたらしたわけではない。

6) 「暗い道」の章で、少女が後景化されることについては、注(3)前掲広瀬正浩論でも指摘されている。また、和

田康一郎「『美しい村』小考-「暗い道」の役割・位置づけをめぐって-」(『東京成徳大学短期大学紀要』33 2000.3)では、その指摘に反駁し、「暗い道」の末尾に「私」が細木家の令嬢と再会する展開の暗示が読み取れないだろうか」と述べている。

7) 「夏」の章で「私」は、絵を描く少女に話しかける画家や、彼女が絵のモデルにしようとする「花売り」の青年に嫉妬を見せている。恋愛相手に接近する異性に対する嫉妬という体を取りつつ、「私」自身が文学においてそうであるように、新しい少女が絵画によって同じ領域の人々とコミュニティを形成する(少女は画家に好意的ではないが)ことを疎外しようとする「私」の欺瞞とも言えるのである。

8) 新しい少女との出会いが、失恋した「私」を救済するとした論として、日沼倫太郎「堀辰雄論-「美しい村」まで-」(『批評』8 1967.7)、本橋健治「堀辰雄『美しい村』の時空」(『湘南文学』3 1992.3)、注(3)前掲野沢京子論文の指摘などがある。

9) 注(2)前掲中村三春論文。

10) 池内輝雄「増殖する物語群-『美しい村』を中心に」(『文学』14 (5) 2013.9)などで、主題が増殖していくことについて論じられている。

*本文の引用は『堀辰雄全集』第1巻(筑摩書房・1977.5)によった。ルビ・傍点は省略し、旧字体は適宜現行の字体に改めた。

(みやむら・まき 聖学院大学人文学部日本文学文化学科非常勤講師)